

特別インタビュー

三菱商事株式会社特別顧問

榎原 稔



鉄は熱いうちに打て

私の経験的留学論

日本の実業界にあつて対米人脈の
中心的存在であつた榎原氏。

その原点となつた若き日の留学時代を
振り返りながら、人的交流の重要性を語る。

まきはら みのもる

一九三〇年ロンドン生まれ。三十七年帰国。戦後四九年に渡米し、
五四年ハーバード大学を卒業。五六年三菱商事入社。初代ワ
シントン事務所長、米国三菱商事社長などを経て、九二年社
長就任。九八年より会長、二〇〇四年より相談役を務め、一〇
年より現職。日本文化交流会議日本側委員長、東洋文
庫理事長なども務める。著書に『私の履歴書』など。

——榎原さんは戦後まもない時期に高校・大学生活をアメリ
カ東海岸で過ごされました。

榎原 旧制の成蹊高校に学びながら、世界の最高峰である
ハーバード大学に留学したいと考えていました。しかし残
念ながら、当時は日本から直接に入学する途はありません
ん。そうしたら、自らもハーバードの卒業生で、日本で聖

公会の主教をされていたケネス・バイエル氏が、ニューハ
ンプシャー州のセントポール高校なら紹介できるといふこ
とで、仲介してくれました。セントポール高校は今でも超
一流のプレップスクールですが、そこで一年間勉強してま
あまあの成績ならば、ハーバードに進めるチャンスは十分
にあるよ、と。実際そのとおりに思いが実現しました。

人格形成期をともに過ごすことで育まれたもの

——一九四九年夏に渡米されます。

槇原 貨物船で横浜港を発ちました。まだ日本円と米ドルが交換できない時代で、財布にはほんの数ドルがあるだけ。でも、不思議と不安はなかったですね。幸運なことに、セントポール高校は授業料全額を奨学金で面倒みてくれたうえ、必要なものを購入するようにと小切手帳まで持たせてくれました。長期の休みには招待を受けて友人たちの故郷に赴いたり、大学が紹介してくれたアルバイトに精を出したり。

アルバイトといえは、ハーバード時代にカウンセラーとして参加した、クエーカー教徒のウェブ夫妻が主催するサマーキャンプが印象に残っています。バーモント州のティムバー湖畔の自然豊かな、といえは聞こえがよいですが、本当に荒涼としたところに、水道も風呂もなく、ただ掘って立て小屋があるだけという、終戦直後の日本を思い出すような場所でした。そこで子どもたちが畑仕事をしたり、カヌーで湖を渡ったり、ハイキングしたり、自然のなかでの生活を一カ月以上も送るのです。驚くのは、参加する子どもたちはニューヨークなどから来る富裕層の子弟ばかり。

しかも毎年参加する人も少なくない。運営を手伝いながら、アメリカ人が持つ自然への畏敬の念や、旺盛な独立心は、このような教育環境から育っていくのだなと感じました。

——英語のご苦労はなかったですか。

槇原 ロンドンで生まれたこともありまして、成蹊中学・高校には清水護先生をはじめ素晴らしい先生がおられ、戦争中も英語の授業に力を入れていました。同級生にも帰国子女が多く、競い合っていました。もちろん授業に追いつけないときもありましたが、成蹊の英語の水準は高かったと思います。もともと私の後に行った有馬龍夫君（元大使）などは、相当苦労をしたようですが……。

——とても充実した学生生活です。

槇原 勉強も一生懸命やりましたし、ライシャワー（東洋史家、元駐日大使）、フェアバンク（中国史家）、エリセーエフ（日本学者）などの先生方との交流から多くを学びました。ハーバード卒業後に、さらに奨学金をいただいていた一年間、欧州やブラジルを文字通り遊学しました。六年間の海外生活を経て、一九五五年暮れに日本に戻り、父の縁があった三菱商事に入社しました。

——留学経験はその後のビジネスに影響を与えましたか。

槇原 米国の友人たちとは、折に触れ政治・経済情勢を胸

標を開いて分かち合ってきましたし、私の世界認識の一つの指標を与えてくれました。八〇歳となったいまでもその関係は変わりません。それはきつと、高校以来の人格形成期とともに過ごしたことで、無縁ではないと思います。

それは、たとえば大学院のビジネススクールではなかなか得られない経験です。三菱商事からも海外のビジネススクールへたくさんの人が渡っています。専門性が高く、実利に直結した世界であるがゆえに、そこで生まれる人間関係は、どうしても限定的になりがちです。ですから、やはり大学生、できれば高校生の留学のチャンスがもつとたくさんあってほしいと思います。

「就職のための教育」が人材の画一化を生んでいる

——残念ながら、日本では海外留学の希望者が減ってきています。

榎原 中国、韓国の若者がどんどん世界に飛び出していくのと対照的ですね。理由はさまざまにあると思います。子の養育や親の介護など家庭環境の問題、就職に過度に傾斜しつつある大学教育、何より日本は安定して居心地がよい社会です。

この傾向には危機感を持っています。教育の問題をはじ

め、多くの意識改革に取り組む必要がある。そうしないと、日本は衰退の途をたどることになってしまいます。

——具体的に、どのようにお考えですか。

榎原 日本の学校教育は、どうしても就職に引つ張られ、それが目的になってしまっています。そうではなくて、もっと広く深い人格をつくる教養を身につける場であってほしい。留学などさまざまな経験を経ることが評価されるようになってほしいと思います。そうでないと、どうしても一つの型にはまったタイプの人間しか生まれなくなってしまう。

——それは企業側の採用のあり方とも関係するのではないのでしょうか。採用時期の問題も含め、留学がかえって不利になることもあるようです。

榎原 そういう状況がないわけではありません。三菱商事は海外で勉強した人を積極的に採用しているほうだと思いますが、現実の採用の手続きを考えると、二〇〇人弱の枠に、数千人の応募があるので、そうなるとうやうやふるいにかけてようやくという面が生まれるのは否めません。しかし、海外での経験を評価しますと明言するくらいのはあってもよいかもしれません。

——現在はアメリカに限らず世界中の情報が日本に居な

がらにして手に入ります。それでもやはり海外に出ることの意味はあるのでしょうか。

榎原 もちろん、大きな意味があります。知識ではなしに、人々との語らいや交流から生まれる友情や、その国の精神風土のようなものは、活字や画面だけからでは吸収できません。それに、海外に出ることの大きな利点の一つは、翻って日本を見直す貴重な機会を得ることができるということです。私自身も、一九五〇年代前半の留学時代には、戦後の荒廃から力強く復興する日本の姿を、七〇年代のワシントン事務所長時代、八〇年代後半の米国三菱商事社長時代には、経済力をもって国際社会における存在感を高める日本を見ました。

しかし、いま海外に行くたびに、内向きになった日本の姿が垣間見え、残念に思います。また、こうした危機感が日本国内で非常に薄いことも懸念しています。若い人たちだけでなく、日本を引つ張るリーダーたちが海外から日本を見て、そのあるべき姿を真剣に考えることが、これまで以上に重要になってきていると思います。

——榎原さんは、日米文化交流会議（カルコン）の日本側委員長として、日米の教育のあり方を検討するプロジェクトも進めておられます。

榎原 日米の教育の制度や実態をよく観察し、来春には前向きな提言をしたいと思います。教員の養成や資格、待遇のあり方も大いに議論したいですね。

カルコンは長い歴史を持った組織ですが、いまは転機にあります。これまでは良好な日米関係と日本経済の成長を背景に、留学生をはじめとする交流がそれなりに盛んであったわけですが、現在は取り巻く環境がだいぶ変わっています。プロジェクトをつくる際にも、具体的に実現可能な提言をつくって、実践、検証していくプロセスを明らかにしていかななくてはなりません。

——教育については、アメリカでもさまざまな取り組みがあります。

榎原 たとえば一九九〇年代に広がった「ティーチ・フォー・アメリカ」などもそうですね。一流大学の卒業生を二年間、国内の教育困難地域に講師として赴任させるプログラムで、高く評価されています。就職のための知識ではなく、教養を重視し、社会に関わることが評価されるような社会風土からは、日本も学ぶべきことが多いのではないのでしょうか。かつて旧制高校が持っていたそのような精神を、それを経験した最後の世代として、伝えていけたらと思っています。■